

Title	ジャン・ゴットマン著 メガロポリス
Sub Title	Jean Gottmann: Megalopolis, the urbanized northeastern Seaboard of the United States
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.1 (1963. 1) ,p.88(88)- 89(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19630101-0088
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630101-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(未来社・B6・二〇五頁・四八〇円)

—松浦 保—

ジャン・ゴットマン著
『メガロポリス』

Jean Gottmann: Megalopolis, The Urbanized Northeastern Seaboard of the United States.

J・ゴットマンの多年にわたり取組んでいた合衆国大西洋岸都市化地域の研究が「メガロポリス」と題されて上梓されたということを知ったのは、今年の五月、シカゴ大学のフランク博士のアフリカの開発問題を扱った小論によってであった。その後一ヵ月足らずして本書を入手することができ、今夏は楽しい読書の時を過ごしたものである。ニューヨークでの出版は昨秋であるから新刊紹介というよりは、書評の対象となるべきものかも知れない。

さて、表題のメガロポリスであるが、その字義は、私見では三つ、即ち、その一は固有名詞でプロボネサスに建設計画されていたというギリシャ最大の都市名(現在でも地名として残っている)、その二は、おそらくこれに由来すると思われる普通名詞、巨大都市も

八八 (八八)

しくは超大都市、そして、その三はP・ゲッデス、L・マンフォード等によって用いられた一九世紀末から今世紀にかけての鉄と煉瓦、煤煙と騒音に象徴される収拾のつかなくなった産業都市群の呼称であるが、本書がいうメガロポリスは、いうまでもなく、前二者をふまえて、合衆国の北東岸——南北はニュー・イングリッシュ南部からヴァージニア北部まで——東西は大西洋岸からアラバマ山麓まで——都市と郊外が殆んど連続的に拡がっている地域を指しており、より一般的には、大規模な conurbation と同義であると考えてよからう。

その構成は、
The Dynamics of Urbanization
The Revolution in Land Use
Earning a Living Intensely
Neighbors in Megalopolis

と題せられる四部、二四章から成っており、全文約八〇頁に余る大著であるから、もとより、ここでその内容を紹介することは至難であるが、おそらく本書には次の三つの性格づけができることを指摘することは有益だろう。即ち、その第一は本書を都市化——その原因・過程・帰結——に関する理論的検討とその現状把握に関する方法的吟味としてみることであり、第二はそれを純粋に地理学的な

批評としての側面ももっている。本書がその地誌的内容にも拘らず無味乾燥にならないのは、都市化そのものに対する卓抜なしかし適格な見解と同時に、著者がこうした意図をもっており、それが文間にうかがわれるからに他ならない。

要するに、本書は現代都市に関する極めてマルチ・ラテラルな研究書であり、単に都市の研究者のみでなく、専門外の研究者、一般の読者にも興味あるものであり、種々な思考の素材を提供するに十分であろう。

(The Dirlington Press, Norwood, Massachusetts, pp. 810, \$10.00) —高橋潤二郎—

福地崇生著

『計量経済学入門』

計量経済学について、「私の経験から、通説できるやさしい入門書を作ろうとしたのがこの本で、主題の並べ方・叙述のしかたは多分に自己流です」と、著者は序文に書いている。その「自己流」とは、計量経済学の「主流はあくまで最尤法による大規模な実証研究なのであります」というところに端的にあらわれている。第一編模型・構造論、第二編推定論、第三編応用論を通して、この立場が貫

新刊紹介

かれていいる。著者の言葉を借りれば、「これはおそらく未熟にして入門書を書くことの特権と限界でしょう。むしろ、「未熟」と云うのは謙遜であって、「大規模な連立方程式による実証研究」と「総合的な分析・予測・計画」問題について、おそらくこの著者はどの豊かな経験をもつものは現在他にはそう多くないから、「私の経験」による「特権」の活用は読者にとっても、貴重なものであることは疑いがない。たとえば、第一編における認定問題、認定条件に関する叙述は委細を尽し、確かな体験の裏打ちをもっている。また第三編における日本経済の計量模型の展望は、模型の操作性という観点をふまえたうえで、適確な評価を各モデルに与えている。それにもかかわらず、やはりわれわれは「最小二乗法を使うような小規模な研究も一応(計量経済学に)包括されますが」という立場にとくに入門書としての本書の「限界」を感じざるをえない。第二編において吟味される最尤法その他の諸推定方法は、「小規模な実証研究」においても利用可能なものであり、また現実的な応用目的と比較・考量するとき、最小二乗法による「大規模な実証研究」もまたその存在理由を持ちうるからである。もとより、著者がその「経験」から、こうした可能性と有用性がきわめて小さいと判断しているのでは

あれば、また話は別であろう。しかし、かりにそうとしても、経済資料そのものの粗放性と理論体系の精緻性を、一体われわれはいかにバランスさせるか、あるいは模型の自律度と推定の確実度をどう評価すべきか、なお問題は残るであろう。

全体を「通説」して、入門書としては叙述も流暢であり、随所に手際よい《要約》が準備され、推定手続き、推定子持性の比較など詳細な《表示》や、適切な《説明図》もあって、すぐれた出来栄である。ただ「大規模な実証研究」という立場から生ずる当然の帰結かもしれないが、第一・二編を通じて数値例が比較的僅かであり、第三編では逆にありあまる素材が十二分にこなされていない嫌いがある。加えて練習問題が添付されていない点は教科書として物足りない。しかし、これだけの小冊子に、「小規模な実証研究」に対する十二分な説明と、教科書としてのこまやかな配慮を求めるとは、云わば望外の感の押し付けなのかもしれない。われわれは、著者の「特権」活用を歓迎し、本書の「限界」をヨリ包括的な——同時にヨリ多面的な——他の入門的教科書によってその欠を補うべきだろう。(東洋経済新報社・B6・三〇二頁・七〇〇円)

—西川俊作—

八九 (八九)